

間々田八幡宮の碑と像について



小山歴史研究会
大島 猛
平成 30 年 9 月 25 日

はじめに

大字間々田には、間々田八幡宮が鎮座する。太古の昔から現在地に鎮座し大字間々田の氏神として、近隣住民の崇敬を集めている。

その広大で荘厳の杜に鎮座する八幡宮には、いくつかの碑や銅像が存立している。

八幡宮を訪れる機会が多いが、それらの碑や像について興味を示す人はさほど多くない。

今回その碑や像の故事来歴を改めて明らかにし、これを広く周知することと事績を後世に残すものである。

本冊子の目次

I	間々田八幡宮の由来	P3
II	八幡宮境内の碑と像	P5
1.	田口妙斎顕彰碑	P5
(1)	田口妙斎とは	P5
(2)	大橋訥庵との交わり	P6
(3)	その後の田口家	P7
(4)	顕彰碑の詳細	P8
①	「妙斎田口翁碑」撰文	P8
②	碑の本文	P9
③	碑の裏側(門人・発起人)	P10
④	篆額	P11
⑤	書	P13
2.	芭蕉の句碑	P15
(1)	境内の碑	P15
(2)	碑の裏側	P15
(3)	碑の建立者、田口久七	P16
3.	境内のその他の碑	P17
4.	明治天皇遥拝(ようはい)の碑	P18
5.	忠魂碑	P19
6.	上原周之助の像	P19

I. 間々田八幡宮の由来

間々田地区の北西部、間々田中学校の東側一帯のうっそうとした森の中に間々田八幡宮が鎮座しています。この八幡宮は主祭神として^{ほんごわけのみこと}（第15代応神天皇）をまつり、社伝によると、天平年中に^{かじしよ}勸請され、天慶2年（939）に藤原秀郷が平将門討伐のために祈願し、乱平定後当社に供御料として斎田を寄進したと伝えています。

また文治5年（1189）には源頼朝が奥州征伐に際し、途中戦勝を祈願し松の木を植樹したといわれています。江戸時代には日光例幣使が参拝したことがありましたが、享和年間の火災消失の後には途絶えました。嘉永4年（1851）現在の場所に再建されました。

境内には3池（現在は2池）があり、もとは溜池として重用されましたが、現在は桜の名所として知られています。

境内の北の一帯は、市の八幡公園に提供されて、市民の憩いの場となっています。（間々田八幡宮資料より）

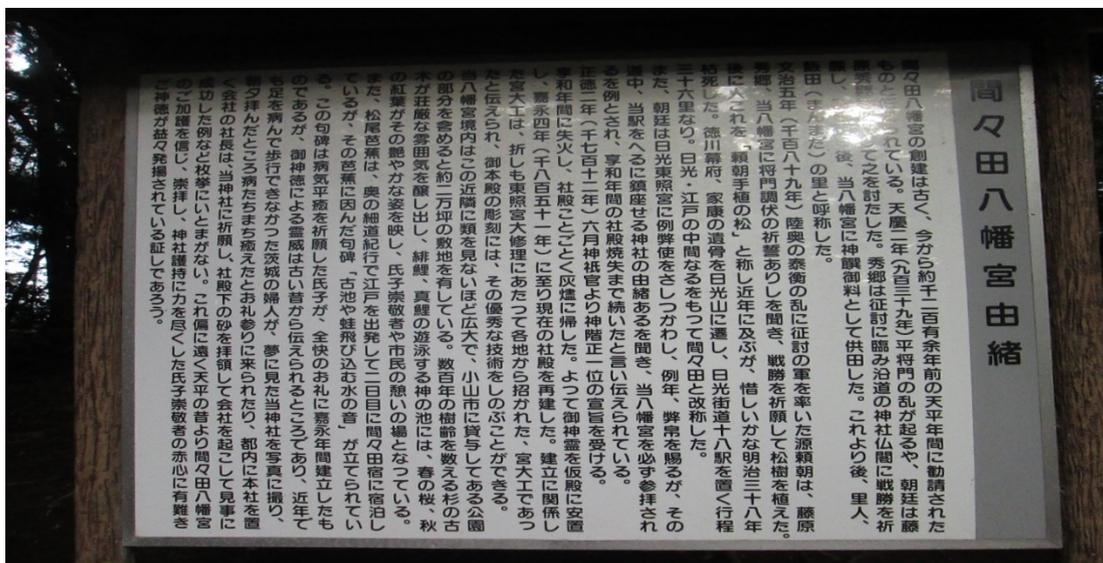
●御由緒（境内提示由緒）

間々田八幡宮の創建は古く、今から約1300年前の天平年間に勸請されたものと伝えられている。

天慶2年（939）平将門の乱が起こるや、朝廷は藤原秀郷等に勅して之を討たした。

秀郷は征討に臨み沿道の神社仏閣に戦勝を祈願し、乱平定の後、当八幡宮に神饌御料として供田した。これより後、里人、^{まゝまが}飯田の里と呼称した。

【境内の由緒板】



●下野国誌には八幡宮の記載がない

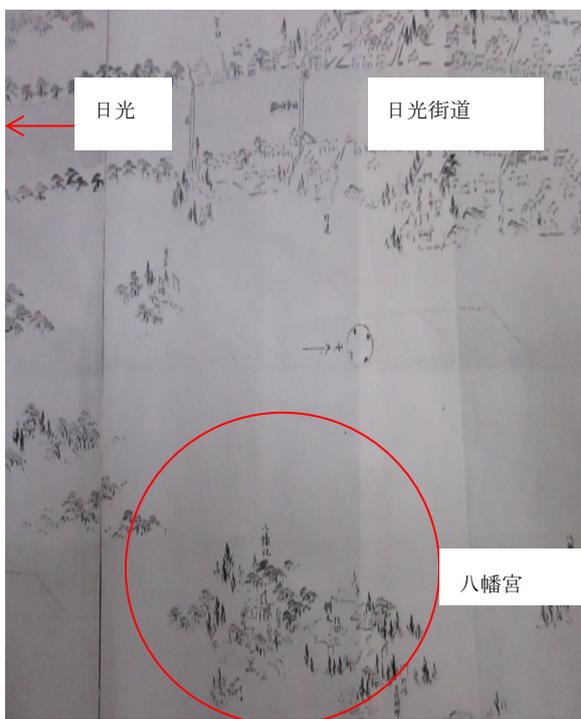
今から 160 余年の昔、芳賀郡大道泉村(現真岡市:旧二宮町)の河野守弘は家産を傾け、その学問を傾注し文政 1 2 年から 20 年の歳月を費やし、下野の隅々まで探訪し、県内の歴史・物産をくまなく調査し「下野国誌」を編纂した。

小山にも足を運び、小山城跡を見て、仏閣は持宝寺(天神町)、興法寺(本郷町)、天翁院(本郷町)、満願寺(立木)、長栄寺(小葉)、称念寺(小葉)、円満寺(上泉)、竜樹寺(寒川)、観音寺(鏡)を訪れている。

又、神社では阿波(粟宮)、胸形(寒川)、高椅(高橋)、小山牛頭天王(須賀神社)、篠塚稻荷明神(小葉)を紹介しているが、国誌に間々田八幡宮や龍昌寺の記載はないのはなぜなのか。

当時日光街道は整備されており、江戸時代末期の大概宿村概況には龍昌寺も八幡宮も載っている。街道に面したり、近ければ必ず立ち寄るはずだが、今となっては知る由もない。

【日光道中分間延繪図に記載されている八幡宮と龍昌寺】



Ⅱ. 八幡宮境内の碑

1. 田口妙齋顕彰碑

【本殿左奥の田口妙齋碑:表】



【碑の裏】



(1) 田口妙齋 (1807～1884) とは

間々田郵便局(三丁目)の隣に綿屋という屋号の田口家があり、現在は蔵のみが残されている。田口氏の菩提寺は龍昌寺で、墓地は 4 丁目の中学校通学道路の東側にある。

田口氏は小山氏の臣であったが、小山氏没落の後、若林監物(結城晴朝家臣)の子三四郎が田口を名乗る。

その子孫が田口妙齋である。妙齋は間々田宿で「蒙求(もうきゅう)堂」という塾を開き子弟の教育に当たる。

蒙求堂の場所は小山市大字間々田字学校 924-1 番地で元の間々田支所(現在の保育所)である。小字はまさに「学校」となっている。

この土地は、田口家から昭和 29 年に中田喜久雄に売買され、その後黒須為之助、西村修平を経て間々田町、小山市と所有権が移転され現在に至っている。

この「蒙求堂」は、明治 5 年の学制公布により、翌年「修道館」とも称されていたが、「間々田尋常小学校」と改称された。

明治 37 年、現在の間々田小学校敷地を、間々田本陣の分家である鶴屋(つるや書店)青木千代吉氏が寄付したことにより移転する。

また上原克己氏によると小学校の敷地の一部は上原家からも寄付をしたという。

尚、現在の小学校の住所は大字間々田字御嶽 1512 地である。学校の西側の急

坂は通称「おたけ坂」と呼ばれているが、小字の御嶽かからとって御嶽坂（おんたけざか→おたけざか）となったものと考えられる。

【田口妙齋生家:蔵のみ存在】

【蒙求堂:間々田尋常小学校跡

:元小山市役所間々田支所】

【間々田三丁目】

【現在市立保育園】



下野史談会会長田代黒瀧氏は、史談会会報に次のように投稿している。

田口妙齋(太兵衛)は、下都賀郡間々田の人、諱は道一と称し、号は思水。文化5年11月13日生まれ。7歳にして龍昌寺の東林上人について句讀を受ける。12歳の時伯父である会津若松の建福寺の住職靈州祖澄に仏学を2年間修める。さらに会津の米澤季四郎に漢学を9年間学び、次いで高津留川について詩文章を5年学び、學成りて郷(間々田)に帰り、私塾を開き子弟を教育した。その教えを受けたものは1千余人に及んだ。その四隣の村の童たちは殆んど妙齋に学び、当時この付近の者で文字を読めるのは、皆妙齋のおかげである。

(2) 大橋訥庵(1816~1862)との交わり

文久2年1(1862)1月15日、江戸坂下門外で時の老中安藤対馬守信正を襲撃した首謀者(計画者)である儒学者大橋訥庵とは交流があった。

大橋訥庵とは栗宮の大橋英齋(医師)の次男知良が宇都宮の豪商菊池家の娘民子の婿として菊池淡雅を名乗る。淡雅は「佐野屋」という屋号で、江戸日本橋で太物(綿・麻織物)や古着などを商い、江戸屈指の豪商となった。淡雅には、教中と卷子という二人の子供がいましたが、卷子の婿となったのが清水(大橋)訥庵である。

小山市本郷町の興法寺には、菊池淡雅が寄納した仏画七幅が栃木県指定文化財となっている。

大橋訥庵は江戸向島小梅村で「忠誠塾」という塾を開いていた学者で、水戸藩下屋敷に近く、水戸藩士や下野の宇都宮藩士が門人として名を連ねている。

訥庵は、勤王の志が厚く、また「鬪邪小言」など多くの著書は幕末の各藩の人々の間でベストセラーになった。

訥庵は、桜田門外で討たれた井伊直弼の後に老中となった安藤対馬守信正や幕閣の政治に異を唱え幕府の体制を変えようとした。

日光輪王寺宮、徳川慶喜を擁して兵をあげることを画策したり、また14代將軍「冢茂」と孝明天皇の妹「和宮」の婚姻(公武合体)に反対した。

一連の計画は門弟の知人による密告で露見したことから文久2年1月12日幕府の手に捕えられた。同時に妻卷子の弟菊池教中も捕えられた。

門人たちは、訥庵等の逮捕による焦りから「斬奸(ざんかん)趣意書」を懐(ふところ)にして、3日後の15日に登城する老中安藤信正を坂下門外で襲ったが、護衛の士に阻まれ、下野本吉田村(現下野市)の河野謙三をはじめ全員が討たれ計画は失敗に終わった。

朝廷、宇都宮藩、佐野屋などの赦免(しゃめん)嘆願(たんがん)が奏功(そうこう)し、7月には、訥庵と教中は釈放されたが二人とも数日後に亡くなり、毒殺(毒を盛られた)の噂がまことしやかにささやかれた。

坂下門外の変から5年後の慶応3年(1867)10月に幕府は政権運営を朝廷に返し(大政(たいせい)奉還(ほうかん))、12月に王政(おうせい)復古(ふっこ)の大号令が出され徳川幕府は事実上崩壊した。

この事件は、明治維新の先駆けでもあり、訥庵らは後に新政府から「従(じゅ)四位(しい)」に叙(じょ)されている。栗宮の大橋家の墓所には訥庵等の顕彰碑が建てられている。

(3)その後の田口家

田口妙斎の長男太平は間々田小学校の初代校長となっている。明治のころの田口家の土地は、街道の自宅綿屋から続く蒙求堂の敷地から線路(宇都宮線)の向こうまであったらしい。現に線路の東側の土地の小字は「学校東」である。

田口太平は娘「スミ」に須田家から婿養子として「明三」を迎え、その長男議一郎は東北大卒でドイツに留学後、足利で医院を開業、議一郎の長男太郎は国立宇都宮病院勤務後宇都宮桜町で田口眼科を開業、妹タミは大平の田村家(江戸時代の豪商で幕末には勤王の志士達を支援している)に嫁いでいる。

太郎は若くして逝去し、現在はその長男が田口眼科として営業している。菩提寺は一丁目龍昌寺である。

須田家と田口家は縁続きであり、現在の光南病院須田家であるという。上原克己氏によれば、須田医者(い)は田口家の一角に住んでいたことを記憶しているとの話である。

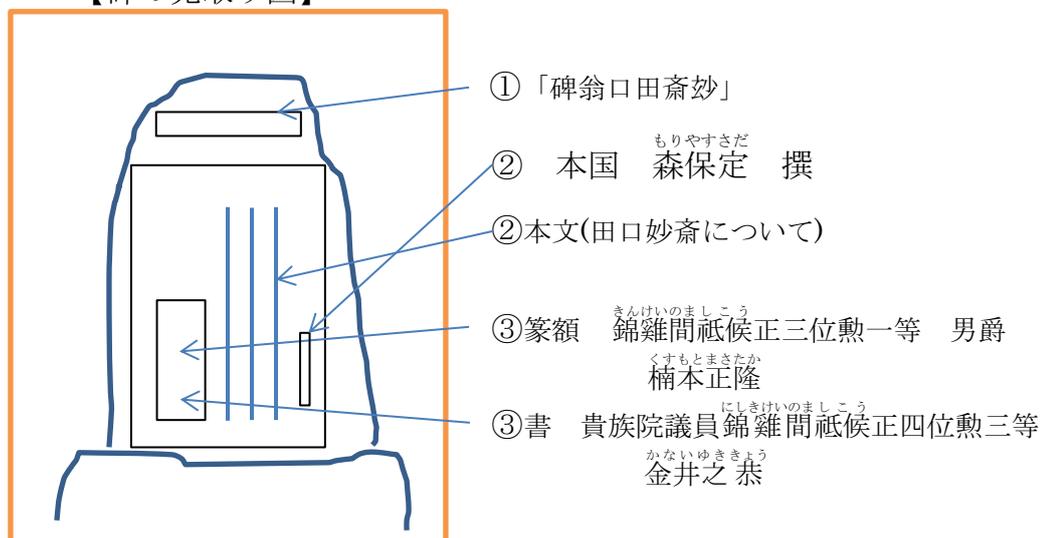
又、綿屋田口家から亀屋田口家(カメヤ洋品→主婦の店)、栃木屋田口家(米穀

販売)が分家している。

綿屋、亀屋、栃木屋の墓所は四丁目の龍昌寺所有で綿屋を中心にして、それぞれの墓地がある。

(4)顕彰碑の詳細

【碑の見取り図】



①「妙齋田口翁碑」撰文 森保定

1)撰文(せんぶん)

撰文とは、碑文などの文章を作ることである。この碑に書かれている文は、森保定という人物が作ったものである。

2)森保定とは森おうそん村である。

森おうそん村は、下都賀郡藤岡町名主森邦治の長男として生まれる。諱は保定、字は士興、幼名定助、のち定吉と改め、鷗村(おうそん)と号す。幕末の儒学者で江戸で萩原西疇、藤山天山、安積良齋らの門に学び郷里で鷗村学舎を開く。歴代の県令より県政について、諮問を受け、師範学校にも招かれたが固辞する。若い頃藤岡の代官から理不尽に名主職、名主見習職を免ぜられたことに抗議し、9年間投獄される。鷗村学舎では、多くの門弟を教え、岩崎清七(実業家)、片山潜(社会運動家)、横山久蔵(岐阜師範学校講師)、田村律之助(大平水代村長、栃木県農会長)などを輩出している。

又、大平の豪農で勤王家の田村治兵衛(後述)との交流もあった。

藤岡町と間々田の関係としては、思川の西は藤岡であり、至近の距離であることから互いに学舎(塾)を開いていたことで交友はあったと思われる。

その縁から田口妙齋の碑の撰文を買って出たものと推測される。

●大平町の豪農田村治兵衛

田村家は、大平水代村の豪農で名主の家柄である。藤森弘庵、滝山西谷などの教えを受け尊皇攘夷の思想を持つ。豪農の田村家には幕末の志士達の援助をし、集まり場でもあった。長州の桂小五郎(木戸孝允)も同家に滞在をしている。

又、下野の勤王家たち、松本暢、川面虎一郎、国分義胤、田村順之助らの子弟を育てる。

この田村家には、田口妙斎の四代後の「田口タミ」が嫁いでおり、現在 93 歳で健在である。

②碑の本文

正(表側には次のように書いてある)

人之处世有遇有不遇、是命之所存不必由、才之大小、学之浅深、何者明示中興偶会、風雲端冕、正笏干庙堂上、而足威權者率武人俗史、若浪士輩、而至儒生・文人寥寥所 觀也、雖或由不知時務、且乏進取氣象、要其人不遇之所至復誰尤焉、是以才学超凡之士、往往老死於窮陬僻落之間、名声不出鄉里者不尠、如田口翁亦其人也歟、翁諱道一、通称太兵衛、田口氏妙斎・思水並其号、下野国都賀郡間々田駅人、十二世祖若林監物仕結城左衛門督晴朝、娶小山政光執権田口丹後守某妹、举男数人、三子三四郎為丹後守、猶子冒田口氏、子孫世住干間々田、考曰美啓、称四郎左衛門、妣小島氏、翁其長子也、年甫七歳就駅内龍昌寺某上人受句読、十二歳至会津若松從伯父建福寺住職某師修仏学、後師米沢某講漢籍、学成帰郷、専任教授、弟子凡一千人、嘉永中米使来求互市、物情恟然、翁与大橋順蔵等交窃議国事、当是之時領主宇都宮戸田候欲辟用、翁固辞不出、明治 17 年 2 月 4 日以病歿。距生文化五季十一月十三日、翁七十七、配小島氏、無子養大島万吉二子俊二郎、為嗣後改太平、翁好詩、善俳歌、花晨月吟詠遺興亦風邪流隱士也、今茲門人胥議欲勒石以伝五乞余文、乃叙其譜銘之曰

同気同類視其友而知其人人之在世徳負弧必有隣翁与訥庵氏交遇失機會可惜衡門棲遲佔畢是事以没世

明治 33 年季一月

錦雞間祇候正三位勲一等男爵 楠本正隆 篆額

貴族院議員錦雞間祇候正四位勲三等 金井之恭 書

■重要部分の読み下し(筆者)

田口妙斎は、諱は道一、通称太兵衛で間々田宿の人である。遡ること 12 代の先祖に、若林監物という結城晴朝(養子秀康とともに越前へ転封)仕えた人物がいた。一方小山政光(小山朝政の父)の執事の田口丹後守を先祖とする田口家があり、若

林監物は田口氏の妹を娶る。男子数人が生れ、その三男が三四郎と称し、田口氏の養子となって代々間々田に住む。妙斎の父は田口四郎左衛門、母は小島氏の出で、妙斎はその長子である。妙斎は7歳にして間々田宿内の龍昌寺の住職に学び、12歳にして伯父である会津若松の建福寺の住職に仏教学等を学ぶ。その後米沢某に漢学等を学び、修行を終えて郷里間々田に帰り、塾を開き多くの門人を教え、その数は千人を数えた。嘉永6年(1853)ペリーが来港し開国を求めた。世情は騒然となり、妙斎は大橋順蔵(訥庵)と、この国事に際し密かに議論を交える。宇都宮城主戸田侯はこの際、妙斎を取り立てようとしたが、妙斎は出仕を固辞した。明治17年に病没した。

③碑の裏側(門人と発起人)

上々段 **大字生井** 荒耨善太郎 荒耨卯右衛門 渡辺勇吉 大橋代蔵
 海老沼忠吉 光野藤吉 **大字吉良** 秋葉豊 秋葉吾一良 高田嘉吉
 秋葉吾三郎 **大字部屋** 新井タメ 松本源吉 野木 熊倉惣祐
 古河 土信田彦衛 川島要吉 須田謙三郎 小野益蔵
 友沼 渡辺角次郎 渡辺市太郎 菅谷七郎左衛門 吉田友之助 寺内
 菊蔵 寺内熊五郎

上中段 **乙女** 青木松次郎 小川善平 青木市郎兵衛 青木与衛門 山中八郎
 兵衛 渡辺三郎 秋山国蔵 武井清一郎 秋山啓吾 秋山忠左衛門
 野沢和一郎 渡辺栄治 **佐川野村** 岩崎平之丞 南飯田 尾島竜蔵
 後部彦兵衛 知久藤十郎 **平和** 島野又吉 渡辺信之進 島野善右衛
 門 石ノ上 青木彦太郎

上下段 **石の上** 山崎甚吾 猪瀬小平 **国府塚** 岸雄一郎 **外城** 飯島令吉
 小山 茂田武八 渡辺文七 **栗宮** 福田力太郎 平間弥太郎 荻野藤
 吉 村田新八 幸田金作 大橋作次郎 **西黒田** 渡辺兵一郎 **東黒田**
 日向野利一郎 日向野甚次 田村広吉 **小堤** 館野正太郎

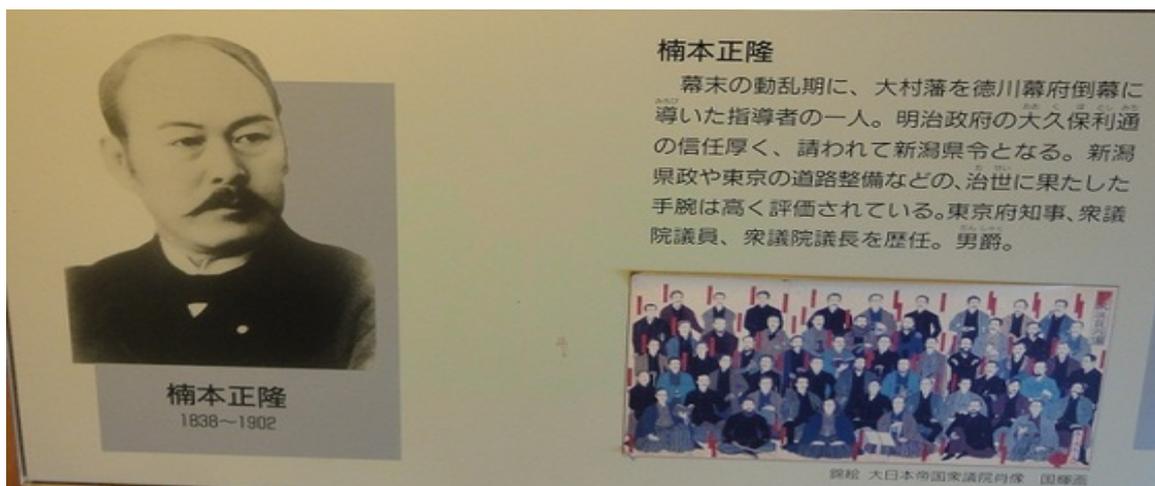
中上段 **小堤** 館野忠三郎 諏訪喜代次 丸林 真瀬惣三郎 若林 上原房
 五郎 上原仙吉 **網戸** 加藤米吉 須田彦太郎 横田与左衛門 黒須
 市之進 稲葉安太郎 小林園助 下川辺代次郎 町田定四郎 **栃木**
 小林儼吉 塚田セン 幸島武三郎 **鹿沼** 柳佐吉 **仁連** 江田栄仙
飯積 佐藤栄助

中中段 **間々田** 渡辺佐四郎 田口寿三郎 稲葉長太 青木千代吉 岩田森三
 郎 田口七郎次 筑後伝次郎 上原与吉 館野要吉 中村彦四郎 中
 村彦四郎 栗原宇太郎 田口宗平 館野寅吉 青木新一郎 角地モト
 古沢清次郎 岩田新吉 鈴木菊太郎 半田儀十郎 館野唯八 田口林
 蔵 知久清三郎 田口岩次郎 館野藤三郎 町田熊吉 田中与五郎

町田岩吉 野村太平 渡辺勘太郎 中村吉太郎 田口栄次
 中下段 間々田 田口安吉 中村栄太郎 田口益次郎 上原幸吉 田口釜一郎
 若林勘一郎 林勝蔵 小島春四郎 飯田倉吉 大木半蔵 知久善三郎
 田口新七 田口常次郎 平井八太郎 根岸栄吉 門人外 毛部川宇三郎
 足利助戸 糸山唯四郎 千駄塚 外山仙三郎
 下上段 世話人 粟宮 幸田喜三郎 慶野林蔵 佐川野 岩崎万次郎 柿沼音
 松 網戸 大窪喜代次 館野愛次郎 青木義一郎 東黒田 日向野清次
 乙女 田中啓次 山中喜十郎 武井祐蔵 友沼 寺内常吉 南飯田
 田中万吉 田中熊蔵 若林 館野儀三良 仁連 鈴木喜久次
 下下段 発起人 大字生井 荒川卯三郎 間々田 青柳藤作 増田彦三郎
 上原丈四郎 柿沼熊蔵 上原孫市 野村啓二 篠崎万吉 島村浅吉 根
 岸祐蔵 根岸久三郎 高木太郎吉 三井善蔵 峯清四郎 青柳七郎 田
 口庄三郎 大家清一郎 中村忠三郎 高島清三郎 館野愛次郎
 栃木町湊川 大内利喜蔵彫刻

④篆額(てんがく): ^{きんけいのましこう} 錦雞間祇候 正三位勲一等男爵楠本正隆(くすもとまさたか)

【楠本正隆と輝かしい事績】



篆額とは、石碑などの上部に篆書(てんしよ)で書かれた題字である。篆書とは、字体を基本とした文字の体裁で、漢字の楷書・行書・草書・篆書・隸書などがある。

従って碑の最上段の 碑翁口田斎妙 が篆額に当たる。

本文の最後には、錦雞間祇候 正三位勲一等 男爵楠本正隆と記されている。

錦雞間祇候(きんけいのましこう)とは、功労のあった華族や官吏を優遇するため、明治時代の半ばに設けられた資格で、職制・俸給等はない名誉職で、宮中席次等では勅任官に準じた待遇を受けた。麝香(じゃこう)間祇候の次に位置する。

正三位(しょうさんみ)とは、律令制下においては、従三位以上を「貴」と称し、また「星の位」ともいわれ、上級貴族の位階であった。

近代以降、正三位の位階は華族の爵位における伯爵の初叙位階とされた他、陸軍大将、海軍大将などが叙せられる位階となった。

勲等(くんとう)とは勲功に対して授与されたものである。日本においては律令制度が出来た当時は勲位と称し、勲一等以下勲十二等までの12等級あった。また、位階勲等という様に叙勲は位階に応じて行われた。

楠本正隆(1838～1902)は、肥前大村藩士で尊皇攘夷論者として倒幕運動に功があった人物で、明治の三傑(西郷隆盛・木戸孝允・大久保利通)のひとり、大久保利通の腹心である。

肥前大村藩士・楠本直右衛門正式(60石)の長男として玖島城下の岩船に生まれる。藩校・五教館の監察、頭取を務め、中老として尊攘倒幕運動で活躍し、渡辺昇らとともに「大村三志士」の一人として知られる。

1868年、徴士として新政府に出仕。長崎府判事兼九州鎮撫使参謀助役をつとめ、1870年(明治3年8月)に外務権大丞、1872年(明治5年)5月に外務大丞を経て、同年5月24日に新潟県令として就任する。1875年(明治8年)11月7日の離任までの間、大川津事件を鎮定、柏崎県を新潟県に併合、第四国立銀行設立など県の近代化に尽力した。日本初の国立市民公園の白山公園を開設する。その他、県議会の開設や地租改正推進などに努め、大久保からは「天下随一の県令」と賞された。その後、東京府権知事、東京府知事となる。

元老院副議長を務め、1890年(明治23年)に衆議院議員に当選し、同年10月20日、錦雞間祇候となる。1893年(明治26年)に衆議院副議長となる。後1896年(明治29年)6月5日、維新の功により男爵を授けられる。その後、錦雞間祇候を拝命する。

●田口妙斎と楠本正隆

楠本正隆は肥前大村藩士で尊皇攘夷論者である。大橋訥庵らが坂下門外の事件の頃はまだ20代の初めであり、江戸詰めなら訥庵が著した「關邪小言(へきじゃしょうげん)」をむさぼり読んだこともあり得る。

また、多くの他藩士とともに思誠塾で訥庵に師事したことも考えられ、田口妙斎とはその縁で接点があったものと考えられる。

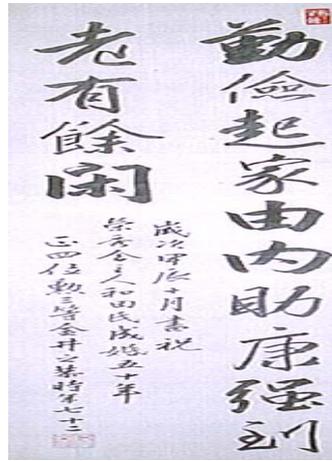
妙斎の篆額、同じ新政府の役人同士であった金井之恭の依頼かもしれない。

⑤書 貴族院議員 錦雞間祇候 正四位勲三等 金井之恭(ゆきやす)と記されている。

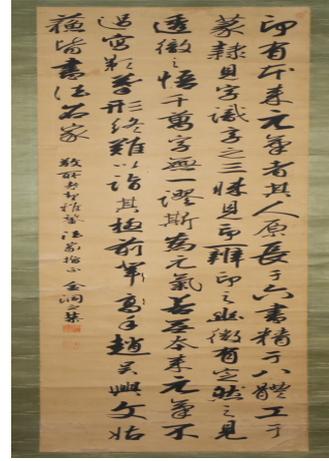
【金井之恭】



【金井之恭の書】



【同】



森保定が撰文したものを、金井之恭(明治三大書家の1人)が揮毫し、その書を石碑にしたものである(石に刻む)。

貴族院(きぞくいん)とは、大日本帝国憲法下の日本における帝国議会上院である。1890年(明治23年)11月29日から1947年(昭和22年)5月2日まで存在した。衆議院とは同格の関係にあったが、予算先議権は衆議院が持っていた。非公選の皇族議員・華族議員・勅任議員によって構成され、解散はなく、議員の多くが終身任期であった。

金井之恭(1833~1907)は、上野佐位郡島村(現伊勢崎市)の勤王家で画家の金井鳥洲(うじゅう)の四男。幕末期の志士、明治期の官僚である。

金井氏は新田氏支族岩松氏の流れを汲むとされる。幼少の頃から文学を好み、また書もよくした。1867年、新田義貞の末裔とされる新田満次郎を擁し倒幕の挙兵を企てるが、事が露頭して投獄される。その後1868年9月、東京府市政局に出仕し、太政官少史、権少内史、内閣大書記官、元老院議官を歴任する。元老院が廃止され非職となり錦鶏間祇候を仰せ付けられる。

書は初め中沢雪城に学び、のち貫名菘翁の書風に傾倒した。明治書壇の有数の大家であり、日本書道会・書道奨励会の会長等を歴任し、明治9年4月に明治天皇が大久保利通邸を訪問した際には、日下部鳴鶴とともに席書を行った。

また、大久保利通が清に渡った際は、井上毅らとともに随行している。

ちなみに、金井鳥洲は画を谷文晁に学び、弟子に足利の田崎早雲がいる。

2. 芭蕉の句碑 「古池や蛙飛びこむ水の音」

この句は、松尾芭蕉の句である。松尾芭蕉は江戸時代前期の俳諧師で、弟子の河合曾良を伴い、元禄2年3月27日(1689年新暦5月16日)に江戸を立ち東北、北陸を巡り岐阜の大垣まで旅をした。その紀行『奥の細道』は特に有名である。

【芭蕉と曾良】



(芭蕉と曾良)

「古池や蛙飛び込む水の音」

野ざらし紀行(伊賀・大和・吉野・山城・美濃・尾張を廻った旅)から戻った芭蕉が、貞享3年(1686年)の春に芭蕉庵で催した蛙の発句会で詠んだ句である。

江戸を発った(元禄2年3月27日)芭蕉一行は、春日部で一泊し、間々田宿には3/28(新暦5/17)で一泊している。宿泊先は脇本陣館野家か、旅館池田屋といわれているが定かではない。

(1)八幡宮の碑

【八幡宮内の芭蕉句碑】



【句碑建立の経緯】



(2)碑の裏側

余往年遊北越 羈館罹疾 伏枕連日 湯藥無効 於是盥漱舌 祈吾鎮守社神
不日霍然 病已蹄郷 猶無恙 神靈之応感 実銘肺腑 因誌其事干碑聊奉
謝万分一云 嘉永六年歳次癸丑秋九月 田口久七為親謹誌

■読み下しは次の通り(筆者)

我(田口久七)は、過日北越に旅行の際、旅館に宿泊中に病気になり、毎日床に臥せっている。投薬するも効果なく、たらいの水で口を漱いで、鎮守(間々田八幡宮)に祈ったところ、にわかになんか病気が癒え、つつがなく故郷に帰ることができた。八幡宮の神が私の願いを聞き届けてくれたのだ。心の心底で実に感銘を受けた。その恩に感謝し、そのお礼の万分の一として碑を奉納する。

案内板も同様のことを伝えている。

句碑の奉納の経緯。『北越遊歴中病に倒れた「田口久七」は鎮守である間々田八幡宮に一心に祈ったところ全快し無事故郷に戻った。神恩に感謝し、これを後世に伝えるためこの碑を奉納した』 建立 嘉永6年(1853)

(3)碑の建立者 田口久七

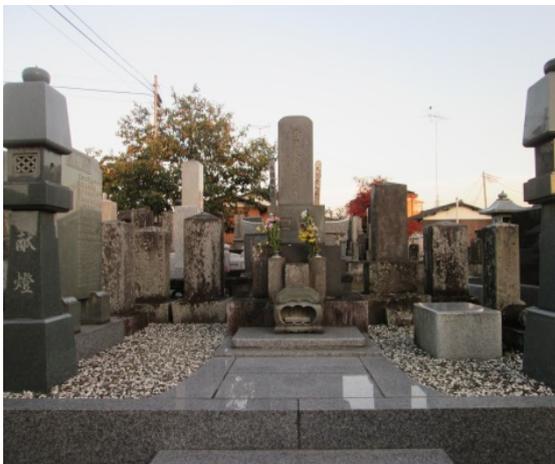
田口久七家は亀屋の屋号で、綿屋田口妙齋家の分家である。また栃木屋(元米穀店)も同様田口妙齋家の分家である。

間々田の亀屋(かめや洋品店:主婦の店)の「田口久七」が寄進したものである。

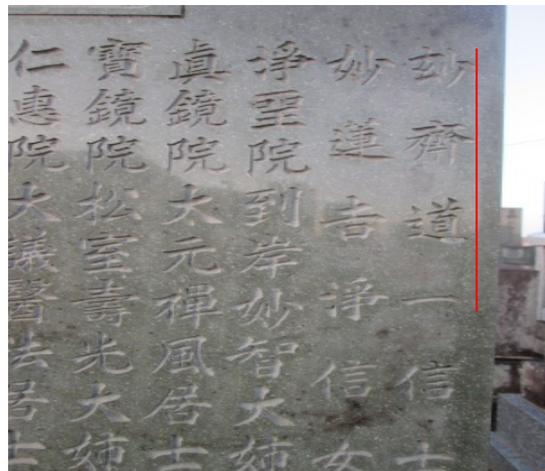
この碑は、田口久七家の子孫は、現在間々田美が丘に居住している。亀屋田口家は、上原克己氏の話によれば、明治か大正の頃、馬車引きで財を成したという。

亀屋の墓所は、綿屋田口妙齋本家の隣で、栃木屋の墓所も本家の左に位置している。

【田口妙齋家】



【妙齋:道一の名が見える】



【田口久七の墓石】



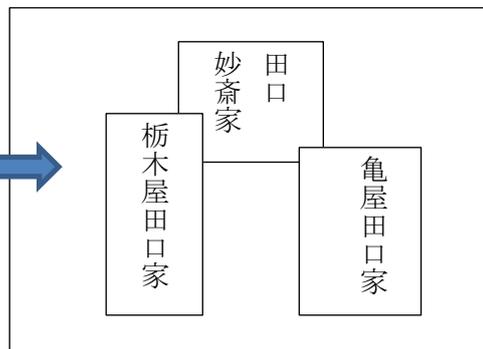
【左拡大図】



【同拡大図】



【田口家本家妙齋家と分家の墓所】



3.境内のその他の碑

「山神」と刻んだものと、富士嶽神社と刻んだ碑が本殿右奥にある。

【山神】



【富士嶽神社】



山神の碑は、明治 27 年 10 月に建立されているが、寄進者の名前は刻まれていない。

富士嶽神社は裏側に明治 12 年 1 月と刻んである。表側に 33 年度「大願成就」願主小社長高橋岩蔵とある。

由来書にあるように、当地出身で東京に出て成功した人が、日ごろの崇敬のご利益だとして当八幡宮に寄進したものである。

4.明治天皇遥拝(ようはい)の碑

明治天皇は明治 5 年~14 年にかけてほぼ日本全国をご巡幸されている。わけでも東北には二度、明治 9 年と 14 年の二度に渡って巡幸されている。

御巡幸の目的は、主に民心の掌握と産業奨励であったとされている。陛下はよく民衆の話を聞き、開拓地や新たな産業を興したところに赴かれ、奨励金を与え、人々を励ましたという。

一回目の東北ご巡幸は明治 9 年 6 月 2 日に東京を馬車で出発している。江戸から間々田まで 18 里、将軍の日光社参は徒歩の行列で、埼玉の岩槻、古河城で宿泊と宇都宮城が三泊目である。

明治天皇の巡幸は馬車であるから、当日中には間々田までは到着しているはずだ。

遥拝とは、遠く、へだたった所から拝むことである。したがって間々田八幡宮に参拝し、遥かに富士山を拝んだか、また間々田に差し掛かり、日光街道の参道入口から八幡宮を遥拝したのだろうか。

間々田八幡宮の碑は大正元年 9 月に建てられている。



明治天皇は、小山で休憩をしている。中央町に天皇行在(あんざい)所跡の碑がある(小山信用金庫須賀町支店の十字路信号の角)。

1 回目か 2 回目かは不明である。間々田八幡宮を遥拝し、そのまま小山宿に進み、休憩をしている。

明治天皇は御巡幸の際、日光に立ち寄られ、中禅寺湖を「幸のみづうみ」と名付けられたという。

5. 忠魂碑



戦没者の忠魂の碑である。明治維新以降、日清戦争や日露戦争をはじめとする戦争や事変に出征し戦死した、地域出身の兵士の記念のために製作された記念碑であり、いずれも戦死者の天皇への忠義を称える意味である。

明治41年3月10日、一丁目坂西上上に建設されたが、昭和33年5月25日この地に移転再建した。

坂西上とはどのあたりか、合いの榎の場所当りが坂下であることから、少し北に進んだ龍昌寺の墓地付近であろうか。

戦没者芳名として、戊辰の役の井岡清三郎、日清戦争の知久又四郎、福田忠造、日露戦争では、田口富蔵、小澤佐太郎、知久清治その他数人が戦死している。太平洋戦争での戦死者が最も多く、その御霊を忠魂している。

日露戦争で戦死の田口富蔵は生井(村)出身で、間々田田口栄次の娘の春子の婿として田口姓を名乗っている。何の功績なのだろうか、勲八等に叙されている。その碑は龍昌寺境内にあるが木が生い茂り気付く人はほとんどいないし、碑が苔むして判読するのが難しい。

6. 上原周之助の像

上原家は、間々田宿の名主である。上原家は小山氏の家臣であったが、小山氏が小田原の役(秀吉の北条攻め)により取り潰しになったことから帰農した。

元々の居住地は5丁目「行泉寺」の東当たりという(上原克己氏)。現在そのあたりの小字は元屋敷となっており、同家の屋敷があった事が推測できる。

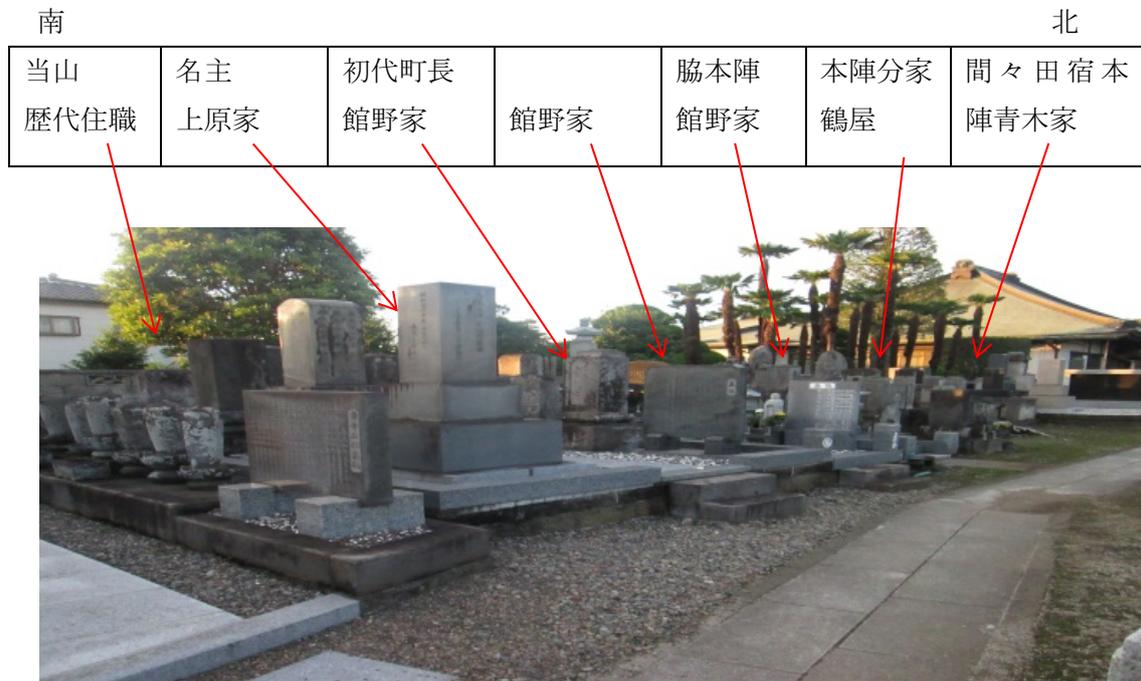
その後、日光街道が整備すると現在地に移り代々名主を勤めている。

墓所は一丁目龍昌寺であり、墓碑には慶長年間の上原尾張守から刻まれている。初代は慶長17年11月27日に没している。

このころから官途名があったことは、小山氏の家臣でとして家禄はかなり上位の者だったと推測される。

龍昌寺の墓地は、西の最奥で北から南に、まず間々田本陣青木家、青木家分家鶴屋(つるや)、脇本陣館野家(間々田初代町長)そして上原家墓所、その隣が龍昌寺歴代住職の墓になっている。

いわば、間々田宿の名主として、菩提寺の別格の存在となっている。



上原周之助氏は、現当主克己氏の祖父に当たる人物であり、八幡宮社殿に向かって左側に銅像が建立されている。

周之助氏像は八幡宮の西側の美田(昔は^{しただめ}下溜・^{うわだめ}上溜・^{なかだめ}中溜といった)を向いて立っている。

この地は、東が間々田の段丘地と西の思川に挟まれた土地で、水利の関係から溜池のような湿地帯であったのだろうか。

思川と八幡宮に挟まれたこの不毛の土地に周之助氏が中心となり、思川から水を引き田圃として開発したものである(土地改良事業)。

地元の人々がその土地改良の功績を讃えて周之助の像を建立したものである。

(境内西に立つ上原周之助像)



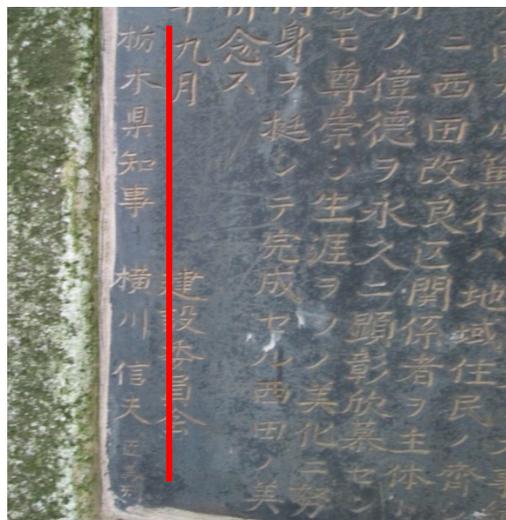
(西の美田を向き、美田を見守る)



【像の裏側】



【揮毫は栃木県知事横川信夫】



■刻まれた撰文には次のように記されている。

周之助氏は、明治21年大字間々田の累代名主名家に生れ、県立栃木中学に学び、卒業後間々田小教員、青年団長を経て農業に励む傍ら、農会長、農村振興、消防団、組頭、町会議員、農地委員長、選挙管理委員長、衛生組合長、大字区長等産業経済尽くし、文化各委員長、神社寺院総代等無数の役職を50有余年にわたり地方自治進展、社会福祉の向上に全力を傾け、特に大東亜戦争前後の食糧の増産、農業経済確立の基盤づくりため土地改整備を力説。間々田東田及び西田の土地改良事業を企画し、委員長となるや心魂を傾け、努力し見事完成す。かくて多くの大小奉仕に明け暮れ崇高なる篤業は地域住民の多くが敬仰感謝する。

西田改良関係者と各方面の賛助を得て、翁の偉徳を永久に顕彰欽慕せんと、
寿像を建設する。

最も尊崇し、生涯を祖の美化に務めた八幡宮の神苑の一角に身を挺して完成
せる西田を見守らんことを祈念する。

像名揮毫者 栃木県知事横川信夫

昭和 35 年 9 月建設委員会

●上原周之助氏が中心となり、思川からの取水で土地改良を行ったポンプ小屋。

【西田の思川土手のポンプ室
ここで思川の水をくみ上げる】



【ポンプでくみ上げた水がここから
田圃に配水される】



【水路から田圃への配水】



【土地改良により美田となった
数百町歩の西田:前方の杜が八幡宮】



●ご参考

龍昌寺の上原子盈を顕彰した碑があり、撰文は田口道一とある。道一は田口妙斎の諱である。この子盈の名については上原克己氏によれば、上原家の過去帳には見当たらない、美田村の人らしいとのことである。

【上原子盈の顕彰碑】



上原義祭翁碑、諱は易貞、字子盈である。本姓は殿家、近邑石塚里正俊春子、出為上原苗郷嗣、為人温順熱厚、好読書写字、精力過人、蚤歳従会田夫子学算術、研究多季、老而益熱、著書若干卷、
実一大数家也、弟子大進、晩入赤城先生之門、問音韻之学、亦頗臻閑奥、先生許可有子弟、無幾罹疾未偃其功、惜哉是歳 弘化三年丙午五月十又七日竟不起、得寿七十有三、算術門人皆愍悼不堪、相謀立碣、使其姓名不朽乎千世、余成於翁為旧故代之署梗概云 弘化4年丁未春正月 田口道一撰

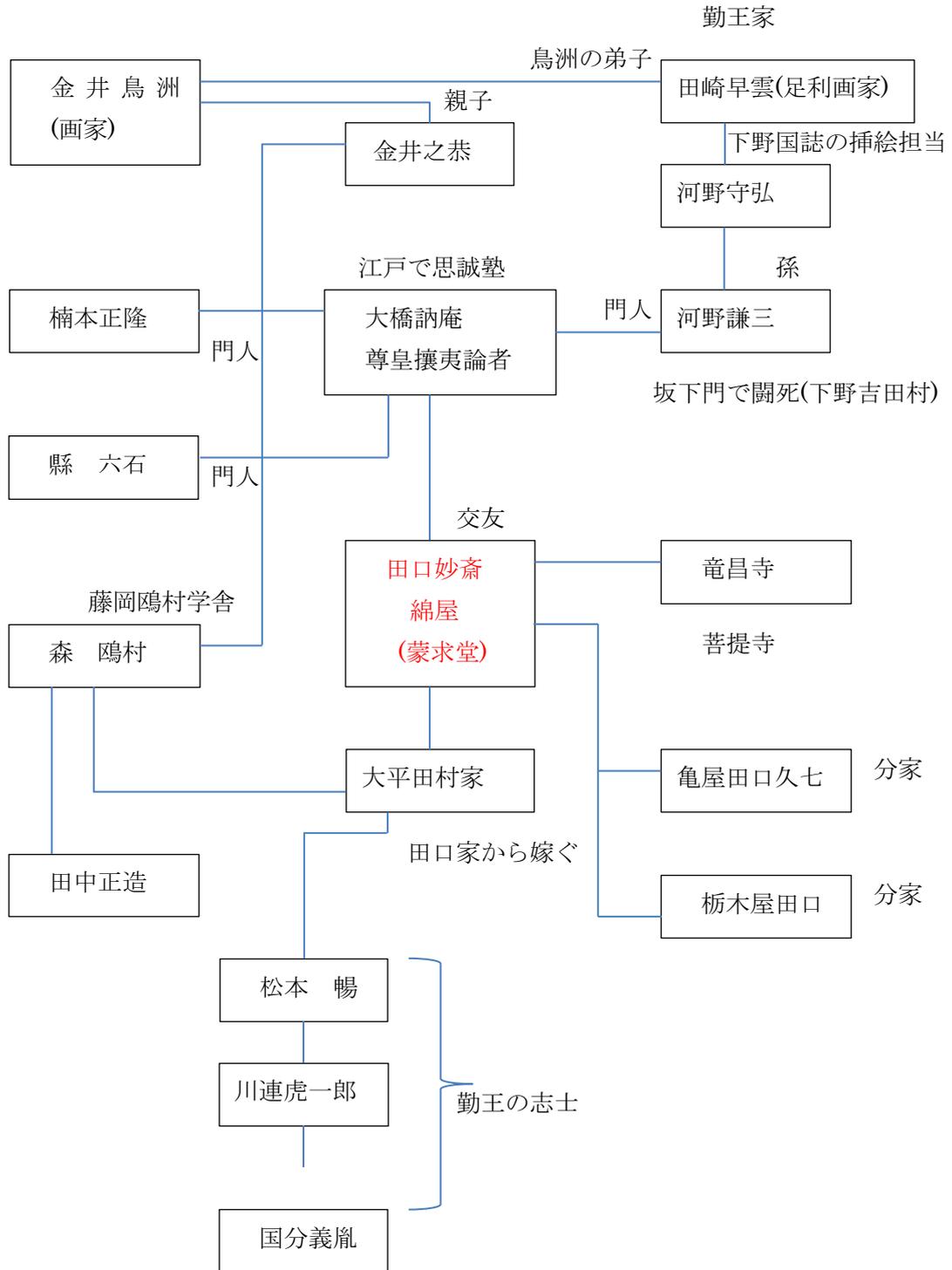
●読み下し(解釈については、筆者)

元々の姓は殿家である。隣邑(村)石塚里(下石塚か:上原克己氏によれば美田村から来た人と合致する)。正俊と春子の子である。上原苗郷の嗣子(養子か)となるため石塚を出る。温厚で熱心な人で、読書と書道を好んだ。何でも精力的にこなし、会田夫子に算術を学ぶ。研究も多く、毎年毎年ますます勉学に励んだ。著書も少し書いたようだ。

一大数学家として、弟子も多く、晩年は赤城先生(訥庵の父清水赤城か)にも学ぶ。音読み、訓読みも得意である。またすこぶる奥深く考える人で、先生の免許皆伝は多数でている。

近頃病気がちで、その功はいつまでも忘れない、惜しい人を亡くしてしまった、算術の門人たちは皆哀悼の意を表し、その死を悼み、算術の門人が追悼のことを相談し、像をつくることにした。

III.関係図



本冊子をまとめるため、次の方々にご協力いただきました。お忙しいなかご丁寧にお教えいただき厚く御礼申し上げます。

間々田八幡宮栗原宮司様、龍昌寺東條住職様、宇都宮市田口玲子様、間々田石川学様、間々田田口利夫様、間々田上原克己様

本冊子の作成に当たり、次の資料を参考にした【参考史料】

資料名	著者	出版社
大橋訥庵全集上巻	寺田剛・平泉澄	至文堂(栗宮大橋家より)
大橋訥庵全集中巻	寺田剛・平泉澄	至文堂(栗宮大橋家より)
大橋訥庵全集下巻	寺田剛・平泉澄	至文堂(栗宮大橋家より)
大橋訥庵伝	寺田剛	慧文社
大橋訥庵	小池嘉明	ペリカン社
下野勤皇列伝 前編	栃木県教育会	私家本
下野勤皇列伝 後編	栃木県教育会	私家本
下野勤王叢書	平泉澄	栃木県
下野勤王詩歌	入江信三良	栃木県
草臣 児島強介	小林友雄	興亜書院
下野勤王史概説(幕末編)	栃木県教育会	栃木県地方思想問題研究会
郷土勤王家調査経過録	早乙女慶壽	県立栃木中学校
坂下門外の変	小林友雄	栃木県師範学校卒業生同窓会
坂下義挙録	沢本孟虎	小塚原回向院殉難列伝烈士遺跡保存会
坂下門外事件の志士たち	古文幻想会	古文幻想会
偉人蒲生君平の生涯	岩崎良能	蒲生神社
郷土勤王家調査経過録	早乙女慶壽	県立栃木中学校
感謝と生き甲斐	大橋良矩(栗宮大橋家)	私家本
菊池勤皇史	平泉澄	菊池氏勤王顕彰会
高久靄外	那須野が原博物館	那須野が原博物館
宇都宮藩主 戸田氏	栃木県立博物館	栃木県立博物館
水戸藩、幕府、朝廷等実録記	栗栖平造	筑波書林
幕末証言「史談会速記録を読む」	菊池明	洋泉社
草莽の系譜(明治維新の底流)	大町雅美	三一書房
人物叢書 渋沢栄一	土屋喬雄	吉川弘文館
下野烈史傳 全	戸田忠剛	吉本書店
栃木県の歴史	阿部昭一他	山川出版社
真岡の歴史	真岡の歴史編集委員会	真岡市教育委員会
栃木県史	栃木県史編纂室	栃木県
小山市史	小山市史編纂室	小山市
二宮町史	二宮町町史編纂委員会	二宮町
真岡市史	真岡市史編纂室	真岡市